

RAD-AR News

RISK / BENEFIT ASSESSMENT OF DRUGS -ANALYSIS & RESPONSE

Series No. 98 April. 2012

Vol.23
No. 1

Contents

○理事長挨拶	2
○副理事長挨拶	3
○中期活動計画12-16 ～RAD-AR活動の実現に向けて～	4
○平成24年度事業計画と運営方針および予算の概要	6
○「くすり教育」の現場をメディアが取材 ～第3回メディア勉強会開催～	8
○子どもの薬の使用実態 ～調査データ公開～	10
○くすりの適正使用協議会に期待すること ～RAD-AR活動のあり方に関する検討会～	11
○患者が必要とするくすりの情報を如何に伝えるか ～くすりのしおりを活用したクラウド健康管理サービス～ 有限会社サンハロン 広井 嘉栄氏	12
○診療情報データベースに対する診療医の意識調査	14
○第3回「くすり川柳コンテスト」入賞作品発表!	16
○掲載紙(誌)Web(平成23年度一覧)	17
○イベントカレンダー／編集後記	20

個々のニーズに合った、医療の高度化にマッチした活動に重点を置いて展開を!



くすりの適正使用協議会
理事長
黒川 達夫

ICHが具体的な動きを見せ始めた時期です。

その後、医薬品の世界、医療の世界、そして何より人口構成等をバックにいたしました日本の患者、国民の環境は大きく変わっています。それを踏まえて、個々のニーズに合った、医療の高度化にマッチした活動に重点を置いて展開していきたいと考えています。

現在は、高齢化社会の只中にありますて、今後30年ぐらい、人口が増えてくるのは後期高齢者といわれる75歳以上の方々になります。これからそういった人生の成熟期に入る方も増える中で、ぜひ医療や健康について一般の方々の意識を啓発する、そして医療の大きな柱を提供している薬物療法について正しく知っていただくということが、日本の今後に極めて重要であると考えます。

一言で申しますと、「医薬品リテラシー」の育成が必須であり、急いでこれを充実しなければいけないと考えております。

リテラシーというのは、医薬品の本質を理解して、患者、国民がその働き、何を為すのか、どのように働いて、何が結果として

黒川 達夫 くろかわ たつお

くすりの適正使用協議会 理事長
1973年 厚生省(当時)入省
1980年 WHO出向
2004年 厚生労働省大臣官房審議官
2008年 千葉大学医学薬学府特任教授
2011年 慶應義塾大学薬学部レギュラリー・サイエンス講座 教授
現在に至る

慶應義塾大学薬学部レギュラリー・サイエンス講座で教授をしております黒川達夫と申します。このたびの理事会並びに総会で、私にくすりの適正使用協議会の理事長をせよというご結論をいただきまして、甚だ微力ではございますが、懸命に努力したいと思っております。

くすりの適正使用協議会は、その発足が約23年前ということになります。ちょうどその頃は平成が始まりまして、ベルリンの壁が壊れ、それから

得られるのかということを、よく理解した上で、自分の精神や自發的意欲で医療に参画していくということで、非常に幅広い概念を含んでいると思っています。それによって、いまチーム医療といわれておりますが、まさに患者も積極的に参画をする、そのための十分な基盤を私どもは精一杯用意したいと思っているわけです。何卒ご支援のほど、お願ひしたいと思います。

目指すイメージということがですが、言うまでもなく医療の専門家は医師、薬剤師、看護師、歯科医師等が担っているわけです。それらの方々ばかりでなく健康や医薬品、疾病などについて、一般の方々、患者の方々も勉強をする。しかもその材料が信頼性のある、また客観的な裏付けのあるデータに基づいて、それがわかりやすいかたちで提供されることによって身につくということが直接の目的になります。これまで23年にわたる私どもの活動がその礎を培ってきたのではないかと信じている次第です。

そういう意味で、大橋会長並びに海老原理事長がこれまで築いてきた業績、ポリシー、方向性をしっかりと引き継いで、その上で新たな展開を目指していきたいと考えております。

そのためには活動基盤の拡大が必要でありまして、当協議会の目的を理解していただいた上で、さらにご賛同いただく方々、あるいは企業、団体、学会のお力添えとご参画をお願いしたいと考えております。

2012年4月から、17年度をターゲットといたしまして、中期活動計画が作成されました。キーワードは申し上げたとおり、「医薬品リテラシーの育成と活用」ということでありますて、これをバックボーンに展開していくということです。

これは私どもの努力だけでは実現できません。そこで従来の私どもの体制に加えて、これは先発医薬品の部分が多かったわけですが、いま政府全体としても強力に進めております後発医薬品の適正な使用、それから医療専門家による医薬品のリスクやベネフィットの理解、データの作成を引き続き進めて参りたいと思います。それから何より私どもの活動への理解と協力のお願い、それからメディアの方々の理解とお力添え、これらを進めて参ります。OTC医薬品も、この4~5年、スイッチOTCの様相がずいぶん変わっております。その効用や医療の中での位置付けといったようなものも、データの中から、あるいはわれわれの活動の中から理解していただけるのではないかと思います。どうかこういった私どもの目標にお力添えをお願いしたいと考えております。

以上をもちまして、私の新理事長就任あたってのご挨拶とさせていただきます。

今後ともよろしくお願いします。

(平成24年3月14日記)



「国民は、医薬品等の適正な使用や有効性及び安全性の確保に関する知識と理解を深める」への支援を活動の軸に!



くすりの適正使用協議会

副理事長

藤原 昭雄

この度、くすりの適正使用協議会の副理事長を拝命しました藤原です。協議会活動は2004年に薬剤疫学部会(PE部会)の運営委員(中外製薬代表)となって以来7年半活動しております。特に2008年2月からは薬剤疫学部会の副部会長を3年間、また、昨年4月からは特別顧問として引き続き、協議会活動に携わっております。

今回大役を仰せつかりまして、理事に選任され、理事会で副理事長のご指名を受けました。現在日本製薬団体連合会安全性委員会の委員長を務めておりますので、しばらくは兼務の形で活動させて頂く予定です。

さて、2010年4月「薬害肝炎事件の検証及び再発防止のための医薬品行政のあり方検討委員会」においてとりまとめられた「最終提言」の具体化のため、製薬業界としても多くの対応が進行中です。

特に、昨年の2月、厚生労働省の厚生科学審議会のもとに、医薬品等制度改正検討部会が設置され、本年の通常国会への薬事法改正法案の提出を目指し、医薬品等の安全対策の強化について活発な議論がなされました。

この度「薬事法等制度改正についてのとりまとめ」が1月24日、厚生労働省より公表されました。そのとりまとめの中で、「薬事法の目的規定等の見直しとして、薬害の再発を防止するため、医薬品等を使用する国民の役割も明らかにすることが適當である」とされた点が注目されます。「国民は、医薬品等の適正な使用や有効性及び安全性の確保に関する知識と理解を深めること」と取りまとめられています。

まさに、協議会の中期計画のキーコンセプト(医薬品リテラシーの育成と活用)と一致する提言であり、今後、協議会の目指す方向性を示すものともいえます。

黒川新理事長を迎えて、装いも新たに、しかし発足の理念は引き継ぎながら、くすりの適正使用促進に向けて活動して参りたいと思っておりますので、今後ともご支援ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

藤原 昭雄 ふじわら あきお

くすりの適正使用協議会 副理事長

- 1978年 中外製薬株式会社 検査薬機器部 入社
- 1998年 中外製薬株式会社 医薬学術部 安全性管理室 室長
- 2002年 中外製薬株式会社 安全性情報部 部長
- 2006年 中外製薬株式会社 ファーマコビジランス部 部長
- 2008年 くすりの適正使用協議会 薬剤疫学部会 副部会長
- 2010年 日本製薬団体連合会 安全性委員会 委員長

中期活動計画12-16 ～RAD-AR理念の実現に向けて～

概 要

くすりの適正使用協議会は、設立後20余年の間、「医薬品の本質の理解促進と医薬品の正しい用い方の啓発活動」を展開し、医療での科学的検証法(薬剤疫学)の定着、医薬品情報提供(くすりのしおり)などの実績を積み上げてきました。

今般、この実績をベースに次の新たな活動ステージへのマイルストーンとして「中期活動計画12-16～RAD-AR理念の実現に向けて～」を策定しました。

キーコンセプトを「医薬品リテラシーの育成と活用」と定め、国民の医薬品の適正使用につながる基盤を構築するため、次の四つの基本戦略を推進します。

基本戦略

1. 国民のくすりへの意識をレベルアップ
2. 医療専門者への「医薬品リテラシー」の知識・技術の向上と医療エビデンスの創出・公開を支援
3. ベネフィット・リスクコミュニケーションを推進
4. 活動拡大への基盤を構築

これらの確実な実行を通じて、安全で品質の優れた医療確保ができるような新たな価値を創造しつづける協議会に変革していきます。

* 医薬品リテラシー：医薬品の本質を理解し、医薬品を正しく活用する能力

**医療専門者：医療従事者や医療関係者等をいう

期 間：2012年4月～2017年3月(5年間)
キーコンセプト：医薬品リテラシーの育成と活用

目 標

- 国民が、
- くすりを理解し、適正に使用する。
 - 病気の治療に自分の意思を反映させる。
 - バランスのとれた医薬品情報(効き目と安全性)を得る。
 - セルフメディケーションを正しく実践する。

*セルフメディケーション：自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること。その手段の一つとして医薬品の使用に関する考え方や留意点が示されている。

2010年に当協議会が実施した意識調査では、きちんと「くすり」を用いる人は約36%に過ぎず、大半の人は「治った」等の自己判断で正しく用いていませんでした。その根本的な理由は「医薬品リテラシー」がきちんと身についていないことにあると考えられます。

この度の中長期活動計画での各事業は、それにおいて「医薬品リテラシー」のレベルを押し上げるものであり、5年後には総和として「50%の人」がきちんと「くすり」を用いることを目標として活動を展開していきます。

基本戦略の具体的取り組み

1. 国民の医薬品への意識をレベルアップ

当協議会の活動を医薬品業界の社会貢献と位置づけ、イニシアティブをとって、国民へ医薬品の情報提供と教育によって医薬品リテラシー獲得を目指します。

(1) 国民が必要とする情報を3方向から継続的に強化

- ① 従来のくすり教育を発展させ、子供から大人までの幅広い層を対象に医薬品の全体像を示す情報「医薬品の知識」を提供します。
- ② 報道記事などによる医薬品の情報について客観的な見方を提示します。
- ③ くすりのしおり[®]を積極的に活用して、製薬企業からの国民への情報提供を支援します。

(2) 適正医薬品情報提供への対応

患者も医療チームの一員として治療に参加する環境を醸成するために、必要とされる医薬品情報と、それが提供される基盤作りをします。

(3) 公教育における「くすり教育」のフォロー

中学校では平成24年度に医薬品教育が導入され、それに伴って高等学校でのそれが平成25年度からレベルアップされます。これに呼応して、教育現場で必要とする「教材」の開発と提供を進めます。

2. 医療専門者への「医薬品リテラシー」の知識・技術の向上と医療エビデンスの創出・公開を支援

(1) リスクマネジメントの調査研究と結果の公表

海外を含めリスクマネジメント(ベネフィット・リスクコミュニケーションを含む)に関する最新情報を調査、検討し、その結果を公表します。それを、製薬企業、医療専門者、更には一般国民にとっての適切なリスクマネジメント実践につなげていきます。

また、医薬品リテラシー育成の一助にします。

(2) 薬剤疫学および関連分野の啓発

薬剤疫学に加えて、その応用と考えられるリスクマネジメント等について、医療専門者、製薬企業の方々に啓発する場を提供します。

また、出前研修を行います。

(3) データベースの拡充と活用

既存の降圧薬と高脂血症治療薬のデータベースを拡充するとともに、企業会員だけでなく、アカデミアも対象にそのデータベースを利用した薬剤疫学研究を勧誘し、エビデンス創出を図ります。

3. ベネフィット・リスクコミュニケーションを推進

ベネフィット・リスクコミュニケーションとコンコーダンスを通じて、結果として患者(家族)が自己の薬物治療に意志を反映させられるよう方策を検討します。

4. 活動拡大への基盤を構築

ジェネリック医薬品やOTC医薬品を含めた広範囲の医薬品を対象とします。

また、対外的に、専門家と連携し、活動計画の実効性を高めるとともにメディア等と連携して社会に活動を公表するなど透明性を確保していきます。対内的には、一致団結して協議会の活動に取り組む体制とします。

こうした連携のもと、社会の医薬品リテラシーの向上を図り、賛同者(会員)増につなげます。

運営方針について

当協議会は、医薬品に関する社会貢献活動の拡大を図ることが「会員への利益還元につながる」を基本方針としています。先発医薬品、ジェネリック医薬品、OTC医薬品の製薬企業、医療専門者、メディアなどの分野の賛同者の拡大に努めるとともに、効率的運用の観点から会費の低減下に努めます。

平成24年度事業計画と運営方針および予算の概要

副理事長 兼 統括部会長 藤原 昭雄

平成24年度事業は「中期活動計画12-16 ~RAD-AR理念の実現に向けて~」の初年度であり、リニューアルした協議会活動の第一歩を踏み出す重要な年です。

キーコンセプトである「医薬品リテラシーの育成と活用」に必要な四つの基本戦略は以下の通りです。

四つの基本戦略

1. 国民のくすりへの意識レベルアップ
2. 医療専門者への「医薬品リテラシー」の知識・技術の向上と医療エビデンスの創出・公開を支援
3. ベネフィット・リスクコミュニケーションを推進
4. 活動拡大への基盤を構築

これらの基本戦略を推進すべく、前年度事業の成果を継承し、新たな活動のステップとなるべく活動します。また、新体制に伴う組織の整備とともにすべての活動において医薬品業界の社会貢献活動として、関連団体との連携のもとに推進します。

今年度計画されている事業

① くすり教育

- 1) 高等学校用教材を医薬品業界団体等と協働して制作します。
- 2) 高等学校、中学校の「医薬品教育」のフォローとして、教育担当者を対象とした出前研修を依頼要請に応じて実施します。
これらにより、公教育でのくすりの正しい使い方を普及させることができ、生徒に対し、医薬品リテラシーのベースを培うことができます。

② 国民が必要とする情報の提供

「医薬品リテラシーの育成」のプログラム(向上のための方法論、重点啓発地域の選定など)を作成し、具体化していきます。このことにより、一般国民の医薬品リテラシーを育成していきます。

③ くすりのしおりコンコーダンス

「くすりのしおり®」の掲載数・掲載率増加に合わせて、「くすりのしおり®」の役割について医療関係者(薬局及び病院薬剤師等)より意見を収集し、利便性を高めます。また、コンコーダンスの一例として「くすりのしおり®」の具体的な使用方法を医療担当者に紹介し、その活用を促すことにより、医療者と医療消費者とのコミュニケーションの円滑化を目指します。

④ リスクマネジメント／ベネフィット・リスクコミュニケーションの啓発

医療専門者及び製薬企業担当者のリスクマネジメント／ベネフィット・リスクコミュニケーションの知識や技能の向上を目指して、セミナーを開催するとともに海外情報等の最新情報の調査、評価を行い、公表していくことにより、製薬企業や医療専門者が適切なリスクマネジメント／ベネフィット・リスクコミュニケーションが実践できるように支援していきます。

⑤ データベース

薬剤疫学研究の普及・啓発を図るために、データベースの構築、利用が不可欠です。そのため以下のような2つの事業を展開していきます。

- 1) 現在までに蓄積した降圧剤、高脂血症用剤の使用成績調査等のデータベースをさらに充実します。
- 2) 本データベースを活用した薬剤疫学研究を推奨し、エビデンスを創出する活動を展開します。

⑥ メディアリレーション

メディア勉強会を継続して開催し、また、くすりに対する国民の関心を高めるイベントを検討します。

⑦ 適正使用情報の検討

国民が医薬品情報を得やすくさせる商品名の情報公開を推進するため、どのような事業を展開するのが良いか有識者を交えて検討していきます。具体的な事業が明らかになりましたら、平成25年度以降、具体的な事業を展開していきます。

平成24年度収支予算 (平成24年4月1日～平成25年3月31日)

<収入の部>

(単位:千円)

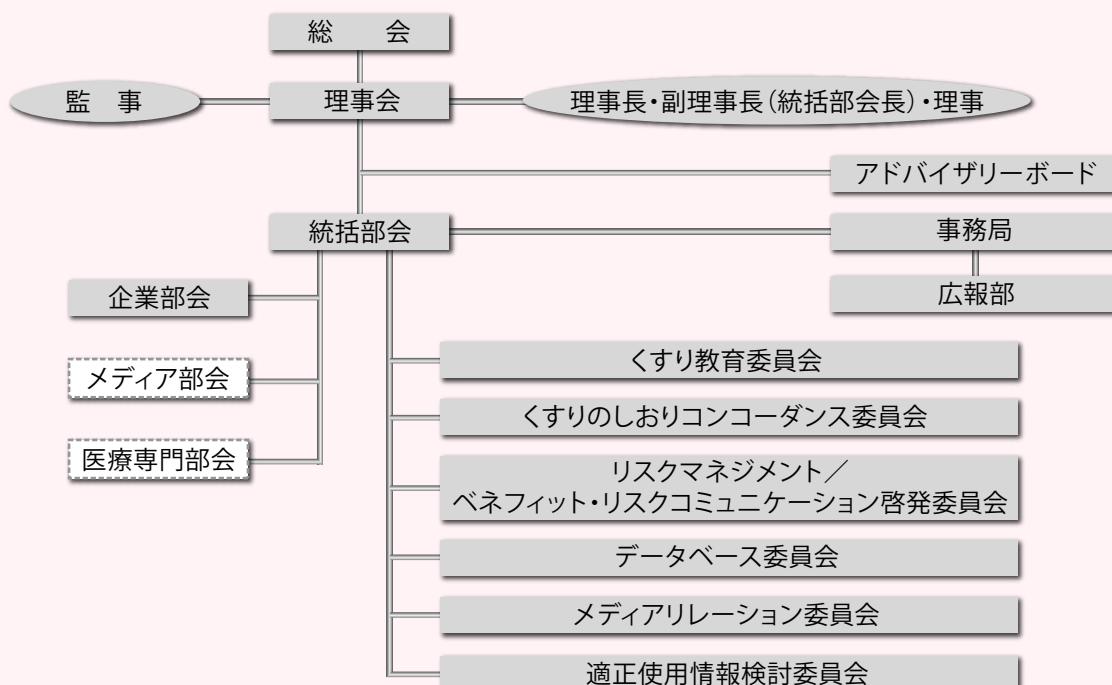
科 目	平成24年度予算
会 費	114,000
雑収入 (利子、研修参加費、等)	1,000
合 計	115,000

<支出の部>

(単位:千円)

科 目	平成24年度予算
事業費	54,000
①くすり教育	(12,500)
②くすりのしおりコンコーディンス	(5,000)
③リスクマネジメント／ベネフィット・リスクコミュニケーション啓発	(7,000)
④データベース	(8,000)
⑤メディアリレーション	(8,500)
⑥適正使用情報検討	(1,000)
⑦広報(RAD-ARニュース、メルマガ、プレス発表)	(12,000)
管理費	61,000
①定例会議	(5,000)
②事務局運営	(56,000)
合 計	115,000

新体制の組織



第3回 メディア勉強会を開催

メディアリレーション委員会
(旧:コミュニケーション部会 広報委員会)

～4月より中学校で完全義務教育化～ はじまる『くすり教育』の現場をメディアが取材



授業風景

メディア勉強会は、医療・健康・生活・教育担当の記者の方々を対象に、「くすりの適正使用」に関する深い理解を促すために開催しております。2011年度は、第1回『くすりの適正使用のために今、知りたい、くすりのリスクとベネフィット～東日本大震災の事例とメディアに期待する役割～』(7月)、第2回『くすりのベネフィットを最大限に得るために～調査結果から考えるくすりの適正使用の課題～』(10月)と開催し、第3回にあたる今回は、2012年4月より中学校で完全義務教育化される『くすり教育』をテーマに、2月28日(火)、東京都文京区にある国立大学法人筑波大学附属中学校にて、実際の授業を見学していただく勉強会を開催しました。

今回のメディア勉強会は、①くすり教育の概要説明、②授業見学、③先生・生徒への質問会の3部構成で行われました。

第①部「くすり教育の概要説明」

冒頭、くすりの適正使用協議会大橋会長より挨拶があり、次に、当協議会が教育者に向けた教育プログラムや教材の提供など、「くすり教育」の普及のために精力的に活動してきた活動実績などについて石橋啓発委員長が説明しました。続いて筑波大学附属中学校の藤堂校長先生より、「近年、コンビニエンスストアなどで簡単にくすりが入手できるようになったことや、インターネットなどによる情報の氾

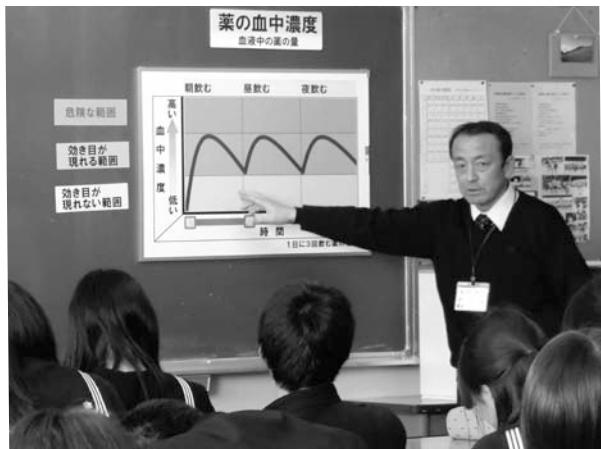


大橋会長挨拶

濫によって、くすりの正しい用い方を教える重要性が増してきたこと」等、社会変化による「くすり教育」の必要性を述べていただきました。最後に、授業を行う保健体育科の小山先生より、今回は3年生のクラスで行うこと、「生と性」の単元の中の一コマとして以前にも、くすりの授業を実施したことがあるクラスであり、今回は特別授業ということで復習になることなどと合わせ、授業の流れについて説明がありました。

第②部「授業見学」

事前の概要説明時に「3年生は高校受験後で緊張がないかも知れない」と、説明がありましたが、授業は一方的な講義ではなく、何人も生徒を指名し、答えさせるという双方向性の授業で活気のある授業でした。授業内容はまず、導入として、生命進化のビデオ視聴、医薬品の歴史、正しい飲み方の確認の講義がありました。続いて、当協議会で貸出をしている「マグネパネル」を用いて、血中濃度の変化を説明、カプセル／錠剤模型を使った、くすりの成分溶解の説明がありました。



マグネパネルを用いて説明



また、生徒に自宅から持参させた医薬品を用いて、そのパッケージや添付文書に記載されている薬効や成分、注意事項などを確認することで、何がわ

かるかを理解させたり、実物カプセルとウエットティッシュを用いて、少ない水分ではカプセルが皮膚にくっつくことを実体験させることで「くすりはコップ1杯の水かぬるま湯で服用する」ことが大切だと意識させるなど、終始、興味を引き、飽きさせない工夫を凝らしていました。



透明カプセルを触っている生徒

最後に、「セルフメディケーション」の意味をビデオ視聴によって意識させること、薬局と薬店は何が違うのかの説明、学校や自宅周辺にはどのような医療施設があるのかを各人の自宅周辺地図を使って色別シールの添付で理解させるなど、生徒にとって身近に感じる資料で授業を進めていました。生徒を「飽きさせない」工夫が盛りだくさんの授業で、生徒のみなさんにとっては、記憶に残る授業になったかと思います。

第③部「先生・生徒への質問会」

授業終了後に、クラスの代表として男女各1名の生徒と小山先生が記者の質問に答える形式の質問会が開かれました。記者のみなさんからは、くすり教育が全体の授業時間に占める割合やくすり教育を取り組んだきっかけなど、これから実施される完全義務教育化の中で、くすり教育が占める役割などについての質問が多くありました。また、先鞭をつける立場での苦労点などの質問から、今後の課題を導きだそうとする姿が見られるなど、くすり教育がどのように社会に影響をあたえるかということについて興味深く聞いていただけたと思います。生徒については、くすり教育で意識がどのように変わったのかなどの質問が相次ぎました。

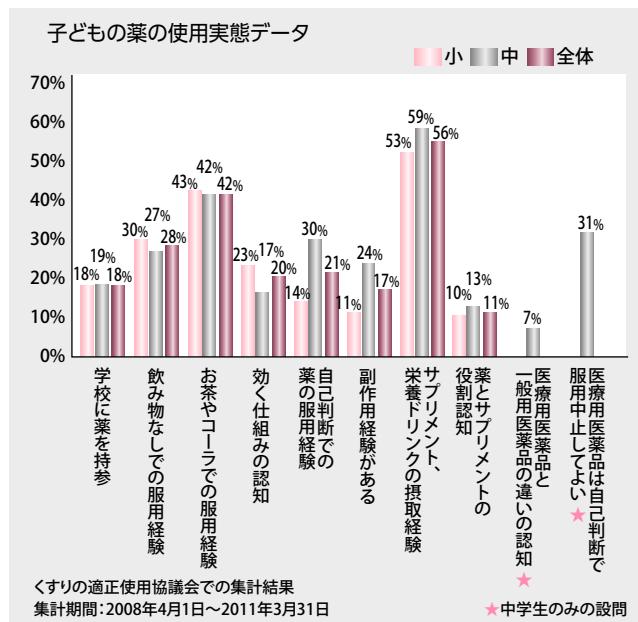
「くすり教育」が新学習指導要領に加えられる背景には、薬事法の改正により、これまで以上に簡単にくすりを入手できるようになるなど国民一人ひとりが自分の健康に責任を持つセルフケアの実践がますます求められるようになったことなどがあげられます。今回のメディア勉強会では、「くすり教育」の先鞭をつける学校の授業内容を見学していただくことで、将来を担う子供達に必要な教育、情報は何か、医薬品リテラシーを高める教育に必要なものは何かなどを意識していただく良い機会になったのではないかと思います。

子どもの薬の使用実態が明らかに!!

くすり教育委員会

(旧: コミュニケーション部会 啓発委員会)

2月末に開催した第3回メディア勉強会^{*}では、始まる「くすり教育」の授業現場を、筑波大学附属中学校の協力によりメディアの方々に公開しました。この勉強会に合わせ、くすり教育の義務教育化直前の子どもたちの薬の使用実態データを情報提供しましたので報告します。



今回の調査は、医薬品に関する教育を実施する教育者(保健体育教諭、養護教諭、学校薬剤師)に対して当協議会の模型教材を貸出す際、授業前および授業後のアンケート調査を依頼して行いました。収集した小学生1,822名、中学生1,544名、計3,366名の児童・生徒の使用実態について纏めました。

その結果、最も特徴的だったのは、自己判断で医薬品を服用した経験を持つ子どもが小学生では14%、更に中学生ではその約2倍の30%に達するなど、成長に伴って自己判断で医薬品を使用する傾向が強くなることでした。

しかしその一方で、最も基本的な医薬品の使い方は守られていませんでした。例えば飲み物なしでの医薬品の服用経験は30%弱、お茶やコーラなどの服用経験は40%強、医薬品の効く仕組みを知っているのは20%に留まっています。また、医療用医薬品は自己判断で服用を中止して良いと、中学生の30%が考えていました。

この医療用医薬品の自己判断での服用中止については、第2回メディア勉強会で取り上げた20歳～69歳の成人男女520名を対象の「医薬品および医

目的	小中学生の医薬品や健康に関する知識の実態の把握
対象	「医薬品に関する教育」の授業を受けた小中学生計3,366名(小学生1,822名、中学校1,544名)
方法	医薬品に関する教育を実施する教育者(保健体育教諭、養護教諭、学校薬剤師)に、模型教材を貸出す際、授業前および授業後のアンケート調査を依頼した。
収集期間	2008年4月1日～2011年3月31日

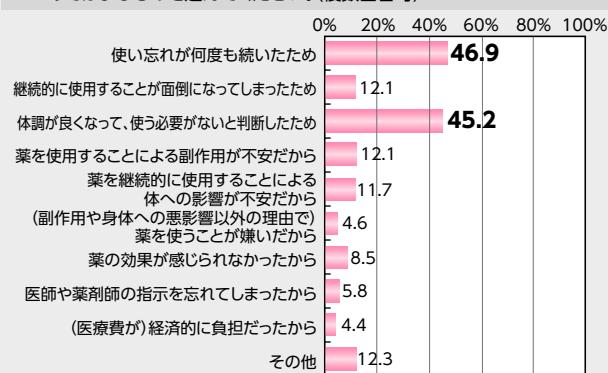
療に関する意識調査^{*}にて、同様の傾向ながらより深刻な結果が見られています。つまり「医師から処方された薬を指示どおりに使用しなかった理由」として「体調が良くなって、使う必要がないと判断したため」と挙げる人が45%に上った結果を見ても、中学生以降おとなに至るまで、正しい知識を得ることなく医薬品を使い続けている現状が推察されます。

今後は、最も基本的な医薬品の正しい使い方が中学校に、更には上述のような医療用医薬品の性質などの医療用医薬品と一般用医薬品の分類、医薬品の審査過程などが高等学校で教えられることになります。

学校に医薬品を持参している小中学生は5人に1人。既に家庭だけでなく学校でも、医薬品は日常的に存在し使われるものとなった現在、今後義務教育として医薬品の教育が行われることで実態がどれだけ改善されるのか、また協議会がそこに協力できるのか、今後も継続して調査を続け、くすり教育の出前研修や教材開発・貸出に力を入れていく考えです。

第2回メディア勉強会:「医薬品および医療に関する意識調査」から抜粋

Q 医師から処方されたくすりを指示通りに使用しなかった理由は何ですか?
あてはまるものを選んでください。(複数回答可)



*「第3回メディア勉強会」の詳細はP8、9に掲載しています。

寄稿

くすりの適正使用協議会に期待すること

レーダー

「RAD-AR活動のあり方に関する検討会」を通じて

協議会へ期待すること

全国薬害被害者団体連絡協議会 副代表 勝村 久司氏

協議会の「医薬品の適正使用啓発活動のあり方」について見つめ直す検討会に参加させていただき、改めて、情報公開や教育啓発などによる医薬品リテラシーの向上の重要性と、そのための効果的な具体策の検討の必要性を認識した。

近年、医療の情報公開が進む中で、処方された医薬品についての情報提供に続き、診療明細書の発行によって、病院で投与された点滴等の医薬品についても正式名称が患者さんに知らされるようになった。

更に、中学校と高等学校の学習指導要領が改訂され、保健の授業で患者教育としての医薬品を、公民の授業で消費者教育としての薬害について学ぶことになり、同時に、「薬害って何だろう?」という教材パンフレットが、毎年、全国の中学生三年生に配布されるようになった。また、同じく毎年100万人以上に渡される母子健康手帳にも、妊娠中、および出産時の医薬品についての記述が掲載されるようになった。

これらは、薬害の被害者らによる、長年の文部科学省と厚生労働省との交渉の成果の一つでもある。

しかし、これらの情報提供や教育普及は、始まったばかりで、まだまだ実質を伴っていない。診療明細書を受け取った患者さんの中には、それを保管する意味がわからないとするアンケート結果も少なからずあるし、公教育の現場でもまだ戸惑いがあり、全国の中学校に配布された教材パンフレットが、段ボールから出されないままになっているものもあることがわかつってきた。母子健康手帳に記載された医薬品の情報提供のためのホームページを見ても、妊娠婦にとってわかりやすい内容になっているとは言い難い。

一方で、薬事法の改正による医薬品の販売制度の変更や、インターネットでの医薬品販売の広がりなど、医薬品に対する消費者の関わり方も大きく変わっている。

このような状況の中で、「くすりの適正使用協議会」には大きな期待と責任がかかっていると思う。副作用被害や薬害などが起こらないよう、今後も、患者さんや薬害被害者の声にしっかりと耳を傾けながら、インターネットを通じた情報提供や、学校教育への教材の提供などを適切に進めていき、活動を更に発展させてほしいと願っている。

「RAD-AR活動のあり方に関する検討会」の詳細は
くすりの適正使用協議会ホームページのTOPICSをご覧ください。

<http://www.rad-ar.or.jp/>



くすりのしおりを活用した クラウド健康管理サービス

『ファルモ』

ソーシャルメディケーションの実現を目指して



Profile

有限会社 サンハロン 広井 嘉栄氏

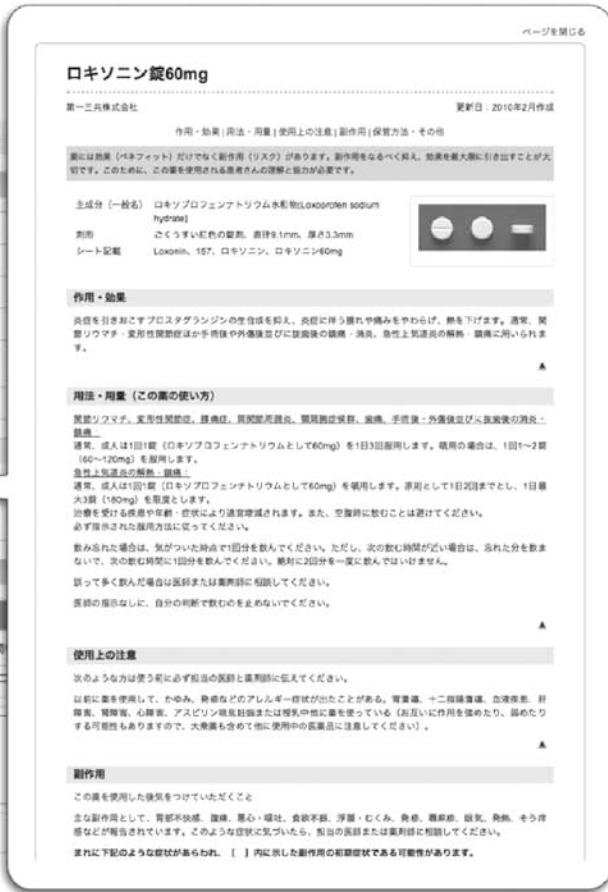
東京理科大学薬学部を卒業後、バイオベンチャーにて遺伝子解析業務に携わる。その後医療情報分野に進み神戸大学医学部付属病院、東京医科歯科大学特任助教を経て、現在は有限会社サンハロンIT事業部部長としてソーシャルメディケーション事業を進めている。

現在、医療機関で処方された薬の履歴を管理する方法として「お薬手帳」が使われています。「お薬手帳」は、重複投与のチェックや薬の相互作用の確認など非常に有効なツールではありますが、今のものは紙の冊子であるため常に携帯することは難しく、東日本大震災など紛失時の問題点も指摘されています。一方で、これまで医療機関内でのみ利用されていた医療情報を、医療サービスの受益者たる国民本人が自らの医療・健康記録として保有し管理活用していくという新しい試みも進められています。内閣官房IT戦略本部が主導する「どこでもMy病院構想」はその一つであり、なかでも最初に着手されるのが「電子版お薬手帳」となっています。

民間でも国の方針に沿う形で、電子版お薬手帳のサービスが一部始まっていますが、単にお薬情報を電子的に渡すだけではなく、その情報をもとに患者さんと薬剤師の双方向コミュニケーションを可能としたのが、クラウド健康管理サービス「ファルモ」です。サービスに登録すると、電子版お薬手帳、家族管理、飲み忘れ防止機能、メモ機能はもちろん、システムを通

じて薬剤師との双方向コミュニケーションが可能になりますが、特に大切にしたのは、「実際に薬を使う患者さんの治療への理解と参加」であり、システムを構築するうえでも医薬品情報の範囲、わかりやすさは大きな課題でした。開発当初は、添付文書をもとにしていましたが、患者さんからわかりづらいとのご指摘を受けていました。そこで様々なデータベースを調査した結果出会ったのが、くすりの適正使用協議会が提供する「くすりのしおり®」でした。患者さんにとってわかりやすいのはもちろんですが、システムに組み込むためには電子的に扱いやすいフォーマットであることも必要でした。XML形式でも提供されている「くすりのしおり®」はシステムへの実装が非常に容易で、メンテナンス性にも優れています。そのおかげで、当システムは「くすりのしおり®」と連動した電子版お薬手帳の開発に成功し、患者さんが理解しやすい形での医薬品情報の提供が可能となっています。そして、そこから新たな患者さんと医療従事者間のコミュニケーションが生まれており、実際に使える現実的なシステムを実現しています。

お薬手帳の電子化はきっかけであり、今後大



量の医療、健康情報を個人で管理する時代がやってきます。専門知識を持たない患者さんができることは限られていますし、医療、健康情報の蓄積、管理が直接的に個人の健康増進につながっていくようなサービスを実現するには、やはり現場の医療人が何らかの形で介在する必要があると考えます。IT化を進めることは、ともすれば『患者任せの医療』、となる可能性も否定できません。逆に、今の情報技術をうまく活用すれば、『患者を医療チームの

一員』とすることも可能です。患者さんをエンパワーメント*。「くすりのしおり®」本来の意義を今一度考えれば、これから医療の方向性のひとつが見えてくると思います。患者さんが自身の医療情報や健康情報を安全に管理し、必要に応じて医療従事者やほかの患者さんと共有し、そこで得られた知見や知識を社会に還元していく医療における相互共助の仕組み、つまり、『ソーシャルメディケーション』の実現に向けた取り組みは着実に動き始めています。

*エンパワーメント:「自立性を支援すること

フルモ URL <https://pharumo.com/info/about.action>

くすりのしおり® <http://www.rad-ar.or.jp/siori/>

診療情報データベースに対する診療医の意識調査(報告)

データベース委員会

(旧: 薬剤疫学部会 PE研究会)

Meiji Seikaファルマ株式会社 佐藤 吉和

大塚製薬株式会社 島川 利幸

田辺三菱製薬株式会社 松川 美幸

はじめに

くすりの適正使用協議会は、1990年設立当初から薬剤疫学研究の啓発と推進を図ってきました。医薬品を使用した患者さんに関する診療情報を集積したデータベースの構築にも取り組み¹⁾、これらは大学、研究機関、医療機関の先生方の研究材料として利用されています。しかし、このデータベースは長期にわたる情報がないことが、一つの課題であると認識されています。薬剤疫学研究の活性化のためにも、当協議会では全国的な規模で長期にわたって収集された診療情報データベース(以下、診療情報DB)が必要と考えています。

欧米には、こうした診療情報DBとして、例えば、かかりつけ医の診療記録を集積したものがいくつか存在します。特にイギリスのGPRD(General Practice Research Database)については、一般化を念頭にデータ収集が行われていることから、多くの疫学や薬剤疫学の研究に利用されています。一方、日本ではこのような疾患横断的かつ地域横断的で一般化可能な研究対象となる診療情報DBは存在しません。

このような診療情報DBを構築するには、診療情報を扱う医師の協力が欠かせません。そこで、当協

議会は、診療情報DBに対する医師の関心度合を見るため、2009年に診療所の内科の医師を対象にオンラインアンケートを実施しました。その結果、診療情報DBの利用に対しての関心は高く(利用したい79.0%)、データ提供にも比較的前向き(提供したい65.4%)な医師が多いことが窺えました。²⁾

2011年の調査

更に2009年のアンケートを参考にして、診療情報DBの利用希望と理由、診療情報DBへのデータ提供の可能性とその際の要件に関する設問を作成し、一般社団法人日本臨床内科医会の先生方に回答していただきました。

2011年2月～2011年3月の間で168人の先生方から回答を得ました。年代別では60歳代が最も多く(44.8%)、続いて70歳代(26.7%)、50歳代(24.8%)でした。

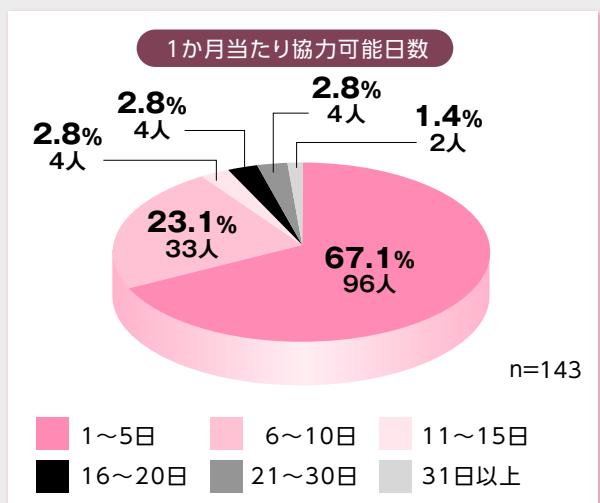
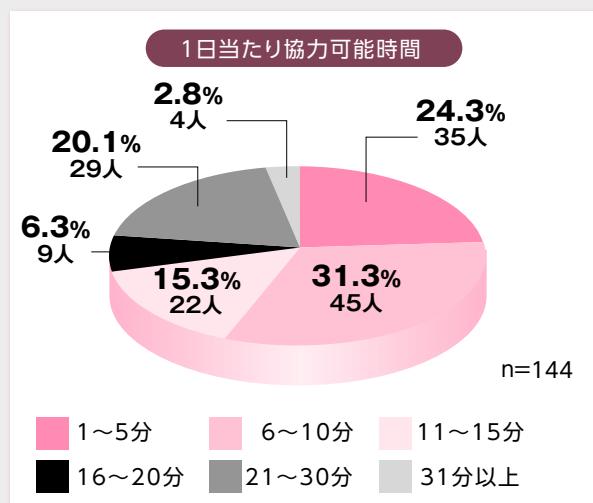
仮に診療情報をデータ提供することを想定した場合、ウェブ形式を好む医師が比較的多く(58.3%)、個人情報保護とかかる時間や労力について特に心配される医師が多い結果となりました(表1)。データ

表1 診療情報データベースに求められていること[データを提供する立場で](評価点*)

重要視されていること(評価点4.0点以上)	
匿名化やセキュリティなどにより、個人情報が保護されること	4.57点
時間や労力がかからないこと	4.51点
データ利用を学術的な利用に制限する等、運営管理体制が整っていること	4.13点
データベース運営者が非利潤追求型組織・非営利の団体であること	4.12点
副作用が疑われる症例情報がわかること	4.06点
あまり重要視されていないこと(評価点3.0点以下)	
謝礼が高いこと	2.96点

*「重要でない、あまり重要でない、ふつう、やや重要、重要」を1～5点の5段階で評価してもらい、その合計を回答者の人数で割ることにより、評価点とした。

図1 診療情報の提供に協力できる時間・日数



提供に割くことのできる時間は、ほぼ半数の医師が一日当たり10分以内、約7割の医師がひと月当たり1～10日までの範囲であれば、時間を取りができると回答されました(図1)。

「データ提供したい」と回答した医師(78人)の間では、出来上がったデータベースが診療に役立つことが提供する理由として挙げられており(85.9%)、また、匿名化やセキュリティによる個人情報保護(75.7%)、時間や労力がかからないこと(55.3%)が「重要」と考えられています。一方、データ提供に否定的な医師(64人)が重要と考える要件は、作業にかかる時間や労力(82.4%)であり、個人情報保護(78.4%)よりも重要視されていました。その他の要件に対する重要性の認識はデータ提供に前向きな医師と同様でした。

また、データベースの利用を希望する医師(114人)の間では、データベースの要件として、副作用が疑われる症例情報へのアクセスを重要視されている医師が多くいました(重要45.6% やや重要31.6%)。

まとめ

2009年および2011年のアンケートにおいては回答者の年齢分布が異なっていましたが、いずれの

調査においても半数以上の医師が診療情報のデータ利用に関心がありましたので、これは医師の年齢にかかわらない傾向と考えられます。

データ提供に関しては、オンラインで調査した2009年の結果より少ないものの、2011年の調査でも医師の半数以上がウェブを介した入力フォームでのデータ提供に前向きでした。しかし、データ提供の際には、個人情報保護や、時間および労力の負担が少ないと特に重要視されていることが、あらためて示されました。一方、データ利用にあたっては、2009年と2011年のアンケートで共通して、副作用に関する情報収集が可能になることに期待が寄せられていました。診療所で蓄積されている診療情報の収集にかかわるシステム開発会社がある場合、アンケート結果を踏まえて診療情報の収集方法等について協議会から提案することも必要だと考えます。

今後も、国内外の情報をもとに、医薬品のベネフィット・リスク評価やコミュニケーションに関する啓発活動を行い、自らもその利活用を実践することで、結果として、患者さんや医療関係者の皆様に活用していただけるような情報を発信したいと考えています。

1) くすりの適正使用協議会. 使用成績調査データベースの利用について. RAD-AR News. 2009;Vol. 20No. 3:P 9.

2) くすりの適正使用協議会. 診療情報データベースに対する診療医の意識調査. 2010.

第3回 「くすり川柳コンテスト」入賞作品発表!

～くすりは正しく飲んでこそ「くすり」です～

“一人でも多くの方が「くすり」について考えるきっかけになってほしい”との願いをこめ、

今年も第3回目となる「くすり川柳コンテスト」を実施しました

(募集期間2011年10月17日～11月30日、応募方法:WEB投稿)。

全国の小学校以上の方々を対象に、「くすりの正しい使い方」をテーマに募集したところ、

5,406句が寄せられました。その後、第1次・第2次選考を経て、入賞作品10句が選定されました。

身近な携帯電話やスマートフォン機能を活用した服薬管理、旅行や災害時における薬手帳の携帯、子供や孫が服用時間を管理する様子、自己判断で他人のくすりを分け合わないなど、今年も日常生活における様々な視点からくすりの適正使用を詠った川柳が寄せられました。

特別審査員として、各部門の最優秀賞および優秀賞を選定したコピーライターの仲畠貴志氏は、応募作品の傾向について次のように述べています。

『テーマは「くすりの正しい使い方」。寄せられた句を見ると、周知度は比較的高いと思われます。特に

子供たちの表現を見ると、よく理解していることに驚かされました。もっとも、句を作るために、今回学んだ効果であるとも言えますから、「くすりの適正使用」の促進は、一方的に情報を流すだけではなく、受け手がその情報を活用(表現)することで、より深い浸透につながると思われます。』

くすりの適正使用協議会では、「くすり川柳」に詠われた、日常生活における人々のくすりとの接し方や想いを参考にしながら、今後も様々な形で、「くすりの正しい使い方」の啓発活動を行ってまいります。

入賞作品		『子供部門』	
最優秀賞	優秀賞	最優秀賞	優秀賞
「兄ちゃんの薬を私に飲ませるな」 平田 千紘さん(9歳)	「兄弟でもわけあいっことはしちゃダメよ」 橋本 真菜さん(6歳)	「飲み忘れ屋にまどめちゃダメですよ」 須藤 ゆりのさん(10歳)	「夜はこれぼくはじいじのくすり番」 西林 遥奈さん(14歳)
「薬にはもうない今は禁止です」 梅山 すみ江さん(54歳)	「家族でも分かちあえない処方薬」 三宅 麻由さん(23歳)	「飲めば効くいえいえ正しく飲めば効く」 水上 美智子さん(58歳)	「飲み忘れ屋にまどめちゃダメですよ」 谷川 ミヤ子さん(73歳)
神奈川県 梅山 すみ江さん(54歳)	大阪府 三宅 麻由さん(23歳)	神奈川県 水上 美智子さん(58歳)	埼玉県 谷川 ミヤ子さん(73歳)
神奈川県 荒井 達也さん(41歳)	神奈川県 三宅 麻由さん(23歳)	宮城県 須藤 ゆりのさん(10歳)	岐阜県 西林 遥奈さん(14歳)
新潟県 平田 千紘さん(9歳)	新潟県 橋本 真菜さん(6歳)	新潟県 西林 遥奈さん(14歳)	新潟県 大熊 蒼平さん(8歳)

今回の入賞作品はホームページ http://www.rad-ar.or.jp/02/07_event/senryu/ でもご覧いただけます。

掲載紙(誌)Web(平成23年4月～平成24年3月)

タイトル	メディア	掲載日
くすりの使い方、大人も子どもも間違いだらけ!	Credentials	2011.4
「出前研修」で教育者支援 ますます必要性高まる「くすり教育」	医薬・健康ニュース	2011.4.1
くすりの授業① 重要性高まる「医薬品の教育」	医薬・健康ニュース	2011.4.1
健康歳時記 くすり川柳	宮崎日日新聞	2011.4.1
健康歳時記 くすり川柳	日本海新聞	2011.4.2
健康歳時記 くすり川柳	夕刊三重	2011.4.5
健康歳時記 くすり川柳	長崎新聞	2011.4.9
くすり川柳 (最優秀賞発表)	公募ガイド	2011.5
学校での医薬品の教育における薬剤師の役割とは?～学校薬剤師に期待したいこと～	Credentials	2011.5
くすりの授業② 信頼性高い「くすりのしおり」	医薬・健康ニュース	2011.5.1
くすりの適正使用協議会が行うくすり教育支援のご紹介	Credentials	2011.6
くすりの授業③ 必要性増す「くすりの知識」	医薬・健康ニュース	2011.6.1
「くすり教育」実施へ講習会 学校薬剤師ら指導法学ぶ	静岡新聞	2011.6.14
ファルマコビジランス分野でのクライシス・マネジメントの現状	Credentials	2011.7
(寄稿) 育葉の風 -RAD-AR-	JPMA News Letter	2011.7
くすりの授業④ 中教審が「くすり教育」推進を提言	医薬・健康ニュース	2011.7
「くすり教育」の進め方学ぶ 駿河地区	静岡新聞	2011.7.4
被災経験もとに医薬品供給体制の見直し提言	日刊薬業	2011.7.6
被災地で“お薬手帳”大活躍、日ごろから一元管理・情報共有を	MTPro	2011.7.6
「新聞方法で薬物療法の阻害も」	MTPro	2011.7.7
災害時の医薬品供給、卸活用を	化学工業日報	2011.7.8
RAD-AR協議会 中期計画で「生まれ変わり」宣言	RIS FAX	2011.7.14
適正使用協 5年間の中期計画を策定、組織改革も	日刊薬業WEB	2011.7.15
薬のリテラシー育成を 新たな目標共有し進化へ	薬粧流通タイムズ	2011.7.15
適正使用協 5年間の中期計画を策定、組織改革も	日刊薬業	2011.7.19
初めて組織体制変更 会員対象の拡大を図る	薬事日報WEB	2011.7.19
災害時の「薬」種類知り複数箇所に情報	産経新聞	2011.7.19
東日本大震災で活躍した「おくすり手帳」の重要性やメディアが果たす役割などについて勉強会を開催	BIGLOBE	2011.7.19
東日本大震災で活躍した「おくすり手帳」の重要性やメディアが果たす役割などについて勉強会を開催	マイライフ手帳@ニュース	2011.7.19
東日本大震災で活躍した「おくすり手帳」の重要性やメディアが果たす役割などについて勉強会を開催	livedoorニュース	2011.7.19
初めて組織体制変更 会員対象の拡大を図る	薬事日報	2011.7.20
被災地の薬剤師活動と課題を報告	薬局新聞	2011.7.20
自分の薬、覚えていますか? 服薬情報しっかり管理を	共同通信	2011.7.23
自分の薬 覚えていますか	熊本日日新聞	2011.7.23
自分の薬 覚えていますか 服薬情報しっかり管理を	神奈川新聞	2011.7.24
服薬情報 しっかり管理を 災害時の混乱に備えて	福島民法	2011.7.25
厚労省検討会 資料館設立で意見交換	薬事日報	2011.7.25
災害時に備え服薬情報管理を	京都新聞	2011.7.26
来年度中学の保健体育「新学習指導要領での薬の正しい使い方」薬剤師研修会開く	毎日新聞(福岡版)	2011.7.29
来年度中学の保健体育「新学習指導要領での薬の正しい使い方」薬剤師研修会開く	毎日新聞(筑後版)	2011.7.29
自分の薬 覚えていますか 服薬情報しっかり管理を	千葉日報	2011.7.31
自分の薬 覚えていますか 災害に備え管理を	徳島新聞	2011.7.31
「第2回くすり川柳コンテスト」結果発表	MIL	2011.8
医薬品の市販後安全性監視のよりよい体制とは	Credentials	2011.8
「起死回生」狙う適正使用協議会 後発品、OTC薬を巻き込む「新機軸」への挑戦	医薬経済	2011.8.1
災害に備え、服薬情報しっかり管理	山梨日日新聞	2011.8.1
服用薬の情報しっかり管理 災害時の混乱・紛失に備えよう	中国新聞	2011.8.1
自分の薬、覚えていますか? まず「お薬手帳」で把握	長崎新聞	2011.8.1
災害に備え管理見直しを 自分の薬名覚えていますか	神戸新聞	2011.8.1
自分の薬覚えておこう 情報の分散管理を	河北新報	2011.8.3
災害時に必要な薬確保 「お薬手帳」の携帯を	岐阜新聞	2011.8.8
幅広い分野から会員募り組織改革へ GEやOTCメーカーも視野	薬局新聞	2011.8.10
医薬品の知識 保健主事が研修	上毛新聞	2011.8.13
自分の薬の名前覚えていますか?	中部経済新聞	2011.8.17
服薬情報しっかり管理 災害時の混乱に備えて	埼玉新聞	2011.8.17
覚えていますか?自分の薬「お薬手帳」常時携行を	下野新聞	2011.8.19
「くすりの教育」を研修 夏休み、先生も勉強	桐生タイムス(夕刊)	2011.8.22
服薬情報 分散管理を 災害時対応遅れ症状悪化も	新潟日報	2011.8.22
自分の薬、覚えてる? お薬手帳身に着けて	岩手日報	2011.8.24
レジストリの活用で、幅広い分野の情報収集を	Credentials	2011.9
自分の薬、覚えていますか? 服薬情報しっかり管理を 災害時の混乱に備えて	紀伊民報	2011.9.3
まずは「くすり教育」はじめてみて	日本教育新聞	2011.9.26

18ページへつづく

掲載紙(誌)Web(平成23年4月~平成24年3月)

タイトル	メディア	掲載日
ファーマコビジランスにおけるシグナル検出を医薬品のリスクマネジメントに活かす ~CIOMS VII報告より~	Credentials	2011.10.10
薬局の上手な使い方 薬の保管方法そして使用期限	ロハスメディカル	2011.10.10
薬は正しく使うことが大切	保健教材ニュース	2011.10.5
くすりの適正使用協議会 第3回くすり川柳コンテスト	公募特急きらり	2011.10.12
第3回くすり川柳	公募川柳データベース	2011.10.13
協議会調査 「指示通り服用せず」、背景に意識の低さ	日刊薬業	2011.10.14
くすり教育の進め方	健康かながわ	2011.10.15
「できる範囲で服薬守ればよい」が半数超、患者の適正使用意識低い くすりの適正使用協議会が調査報告	MTPro	2011.10.17
第3回「くすり川柳コンテスト」	薬局ココイコ	2011.10.17
くすりの適正使用調査 「指示通り服用せず」、背景に意識の低さ	MEDIFAX digest	2011.10.17
第3回「くすり川柳コンテスト」	ゲンダイネット(日刊現代)	2011.10.17
情報偏る“リスクコミュニケーション”に警鐘、京大・中山健夫氏	MTPro	2011.10.18
医療クリップ 第3回「くすり川柳コンテスト」	東京新聞	2011.10.18
得する健康イベント くすり川柳コンテスト	日刊ゲンダイ	2011.10.18
得する健康イベント くすり川柳コンテスト	日刊ゲンダイ(大阪)	2011.10.18
得する健康イベント くすり川柳コンテスト	日刊ゲンダイ(名古屋)	2011.10.18
薬の適正使用に意識低い生活者へ啓蒙を	ココヤク	2011.10.19
薬の適正使用への意識低い生活者へ啓蒙の必要性を強調	薬局新聞	2011.10.19
くすり川柳 作品募集 くすりの適正使用協議会	週刊薬事新報	2011.10.20
第3回「くすり川柳コンテスト」	KKSブログ(教育家庭新聞社)	2011.10.20
「くすり川柳」の作品を募集	産経新聞	2011.10.21
「くすり川柳」の作品を募集	MSN産経ニュース	2011.10.21
「くすり川柳」の作品を募集	産経新聞(大阪)	2011.10.21
第3回「くすり川柳コンテスト」	あなたの健康百科(メディカルトリビューン)	2011.10.21
薬教育どう進める? 中学必修化控え研修会	デーリー東北	2011.10.29
第3回「くすり川柳コンテスト」	登竜門	2011.10.30
平成23年度学校薬剤師講習会報告	しづおか県薬会報	2011.11.1
薬の使い方、指示を軽視	大阪日日新聞	2011.11.3
薬の使い方、指示を軽視	神奈川新聞	2011.11.6
服薬 勝手にやめていませんか? 「医師側も意思疎通徹底を」	山口新聞	2011.11.7
自己判断の服薬中断に警鐘 医師との意思疎通課題	静岡新聞	2011.11.7
薬の使い方、指示を軽視	デーリー東北	2011.11.7
くすり川柳コンテスト	読売新聞(夕刊)	2011.11.8
第3回「くすり川柳コンテスト」	COMPE NAVI	2011.11.8
「くすり教育」の授業方法を学ぶ 必修化に向け研修	東奥日報	2011.11.8
「治った」勘違いしないで 医者との意志疎通を	日本農業新聞	2011.11.8
薬の使い方、指示を軽視	夕刊フジ	2011.11.8
薬の使い方、指示を軽視	夕刊フジ	2011.11.8
くすり川柳コンテスト	読売新聞(高岡)	2011.11.8
薬の使い方、指示を軽視	山口新聞	2011.11.8
薬の使い方、指示を軽視	宮崎日日新聞	2011.11.8
薬の使い方、指示を軽視	産経新聞(東京)	2011.11.10
薬の使い方、指示を軽視	産経新聞(大阪)	2011.11.10
薬の使い方、指示を軽視	伊勢新聞	2011.11.10
薬の不適切使用者 医療者指示を軽視	山陰中央新報	2011.11.10
自己判断で薬服用中断 症状悪化させる恐れ患者と医師 認識にずれ 医師の疎通徹底を	陸奥新報	2011.11.10
薬の服用 「指示通り」わずか36% 医師 患者 意思疎通の徹底を	大分合同新聞	2011.11.11
第3回「くすり川柳コンテスト」	へるすなび	2011.11.12
不適切な薬の使用者 医療者の指示を軽視	毎日新聞(東京)	2011.11.13
薬の使い方、指示を軽視	徳島新聞	2011.11.13
不適切な薬の使用者 医療者の指示を軽視	毎日新聞(名古屋)	2011.11.13
不適切な薬の使用者 医療者の指示を軽視	毎日新聞(北九州)	2011.11.13
不適切な薬の使用者 医療者の指示を軽視	毎日新聞(大阪)	2011.11.13
不適切な薬の使用者 医療者の指示を軽視	毎日新聞(札幌)	2011.11.13
3割の患者が途中で服用を中止	国際医薬品情報	2011.11.14
患者が自己判断多い服薬中断	愛媛新聞	2011.11.15
半数以上が薬の処方箋軽視	沖縄タイムス	2011.11.15
処方薬、医療者の指示を軽視 ネット調査で判明	山梨日日新聞	2011.11.15
医療者の指示「軽視」過半数 ネット調査	新潟日報	2011.11.15
処方薬の指示軽視	長崎新聞	2011.11.15
薬の使い方、指示を軽視	福島民友	2011.11.18
指示通り服薬36% 勝手に中断 症状悪化も	高知新聞	2011.11.18



タイトル	メディア	掲載日
適切な使用は36% 服薬は支持通りに	北羽新報	2011.11.18
処方薬の不適正な使い方 医療者の指示無視	秋田魁新報	2011.11.22
薬使用 多くは医療者指示守らず	北海道新聞	2011.11.23
薬の使い方、指示を軽視 処方薬	熊本日日新聞	2011.11.24
処方薬の不適切使用物 医療者の指示軽視	奈良新聞	2011.11.24
第3回「くすり川柳コンテスト」	CONTEST	2011.11.25
薬の使い方 指示を軽視 調査で実態浮き彫り	茨城新聞	2011.11.27
処方薬不適切使用 医療者の指示軽視	東奥日報	2011.11.28
守れない医師の服薬指示 自己判断で中断、飲み忘れ	神戸新聞	2011.11.28
薬の使い方、指示を軽視	佐賀新聞	2011.11.30
薬や治験に理解を 3日、浜松で市民講座	静岡新聞	2011.11.30
第3回「くすり川柳コンテスト」	公募ガイド	2011.12
新薬開発や使用方法理解深める市民講座	読売新聞(静岡版)	2011.12.2
薬の使い方、間違った理解浮き彫り	中部経済新聞	2011.12.5
医師の指示と服薬にずれ 患者との意思疎通徹底を	苦小牧民法	2011.12.6
医師の指示と服薬にずれ 患者との意思疎通徹底を	千歳民法	2011.12.6
薬の使い方、指示を軽視	千葉日報	2011.12.16
薬の使い方、医師の指示守って	岐阜新聞	2011.12.24
海外の新薬審査情報を読み解く	月刊薬事	2012.1
体験型の環境学習を開催 子どもとためす環境まつり	日本教育新聞	2012.1.9
薬の使い方、指示を軽視	四国新聞	2012.1.16
薬の使い方、指示を軽視	京都新聞	2012.1.31
医学の進歩と臨床薬理学の役割(第32回日本臨床薬理学会年会 採録)	読売新聞	2012.2.4
薬への理解(記者コラム内) くすり川柳コンテスト結果	日刊薬業WEB	2012.2.15
第3回くすり川柳 くすりの適正使用協議会	川柳三昧	2012.2.17
「第3回くすり川柳コンテスト」入賞者決定	あなたの健康百科	2012.2.17
埼玉の荒井さん 一般最優秀賞に くすり川柳	東京新聞	2012.2.19
広告:「第3回くすり川柳コンテスト」～応募総数5,406句の中から入賞作品が決定～	東京新聞	2012.2.23
海外の新薬審査情報を読み解く	月刊薬事	2012.3
4月から義務化、「くすり教育」で中学生の理解深まるか	MTpro	2012.3.2
4月から義務化、「くすり教育」で中学生の理解深まるか	あなたの健康百科	2012.3.2
4月から中学校で完全義務教育化される「くすり教育」、筑波大付属で授業内容を公開、薬の正しい理解が自身の健康につながることを生徒たちも実感	マイライフ手帳@ニュース	2012.3.2
4月から中学校で完全義務教育化される「くすり教育」、筑波大付属で授業内容を公開、薬の正しい理解が自身の健康につながることを生徒たちも実感	BIGLOBE Kirei Style	2012.3.2
4月から中学校で完全義務教育化される「くすり教育」、筑波大付属で授業内容を公開、薬の正しい理解が自身の健康につながることを生徒たちも実感	livedoorニュース	2012.3.2
中学校のくすり教育を公開 RAD-AR	薬事日報	2012.3.5
いよいよスタートする「くすり教育」への期待	薬事ニュース	2012.3.9
東京薬事協会 新規に「薬育支援」盛り込む 公益認定に向け事業強化	薬事日報	2012.3.12
新理事長に黒川達夫氏、新体制へ	日刊薬業	2012.3.15
新理事長に黒川氏、元厚労省審議官	RIS FAX	2012.3.15
「くすり教育」発足 中学校授業見学会を開催	薬粧流通タイムズ	2012.3.15
「くすり教育」中学校で義務化	サンケイエクスプレス(東京)	2012.3.19
「くすり教育」中学校で義務化	サンケイエクスプレス(大阪)	2012.3.19
新理事長に黒川慶大教授 RAD-ARが総会開催	薬事日報	2012.3.19
中学生に「くすり教育」来月から完全義務化	デーラー東北	2012.3.19
自分の責任で健康管理 中学校「くすり教育」義務化	東奥日報	2012.3.19
中学生に「くすり教育」4月から完全義務化	山口新聞	2012.3.19
「命」「生」を切り口に「くすり教育」正しい用法・容量学ぶ	日本教育新聞	2012.3.19
来月から完全義務化 中学生に「くすり教育」	神戸新聞	2012.3.20
完全義務化でくすりに対する意識の変化は?	薬局新聞	2012.3.21
くすり教育 完全義務化 中学校で来月から授業	愛媛新聞	2012.3.21
医薬品リテラシーの育成・活用を推進	薬局新聞	2012.3.21
薬の使い方 授業始まる 法改正契機 中学で4月から	朝日新聞	2012.3.22
中学生に「くすり教育」	山陰中央新報	2012.3.22
中学生に「くすり教育」 来月から完全義務化	岐阜新聞	2012.3.23
中学校で医薬品教育 販売規制緩和で文科省導入	宮崎日日新聞	2012.3.23
中学生に「くすり教育」 4月から完全義務化	四国新聞	2012.3.23
中学生に「くすり教育」 4月から完全義務化	中部経済新聞	2012.3.23
中学生に「くすり教育」 4月から完全義務化	埼玉新聞	2012.3.24
本県の9歳が最優秀賞受賞「くすり川柳」子供部門	新潟日報	2012.3.26
健康守る知識を養成 中学生に「くすり教育」	新潟新聞	2012.3.26
くすり教育 中学生に完全義務化	山梨日日新聞	2012.3.26

(2012.3.30時点)

RAD-AR(レーダー)って、な~に?

RAD-ARは、医薬品のリスク(好ましくない作用など)とベネフィット(効能・効果や経済的便益など)を科学的に評価・検証し、その結果を社会に示すことで医薬品の適正使用を推進し、患者さんに貢献する一連の活動のことです。

イベントカレンダー

◆活動報告(2012年1月～3月)

- 2012.1.16 くすりのしおり登録管理システム説明会(大阪)
- 2012.1.20 第95回海外情報研究会(東京)
- 2012.1.23 くすりのしおり登録管理システム説明会(東京)
- 2012.2.2 平成23年度茨城県高等学校教育研究会保健体育部研究大会(茨城)
- 2012.2.9 第3回くすり川柳コンテスト結果発表(東京)
- 2012.2.28 第3回メディア勉強会(東京)
- 2012.3.9 第96回海外情報研究会(東京)
- 2012.3.14 第39回通常総会 第29回理事会(東京)

◆サイト、web(2012年1月～3月)

- 2012.2.23 【Benesse 教育情報サイト】 2012年度から中学校でスタート! 「くすり教育」って何?
- 2012.3.1 【Benesse 教育情報サイト】 家庭でも始めたいくすり教育

◆出版物

- 2012.5 【薬事日報社より刊行】

4,000名以上の薬剤師・教育者へ出前研修を行ってきた経験から、現場で役立つノウハウを公開。
「くすり教育のヒント～新学習指導要領をふまえて～」(仮)(発刊予定5月初旬)

当協議会の詳しい活動状況(RAD-AR TOPICS)と、RAD-AR Newsのバックナンバーは、当協議会ホームページよりご覧頂けます。

<http://www.rad-ar.or.jp>

編 集 後 記

先日、メディア勉強会に参加し、中学3年生の授業参観をしました。「この時期の中学生は、高校受験も終わり…」と事前説明を受けている際に、ふと「この頃の自分はどうだったかな」と思いを馳せながら、授業参観に臨みました。授業を一生懸命に受ける生徒さんをみてると、「みな、卒業間近で、最後の思い出作りに一生懸命なのだろうか…」と、微笑ましくも感じました。卒業式といえば、我々の時代では「仰げば尊し」が定番ソングでしたが、今ではそれに変わる曲が多くあるようで、特に「旅立ちの日に」という曲がよく歌われているそうです。この2つの歌詞を見比べてみると、「仰げば尊し」は、過去を振り返り、思い出を噛みしめる内容、「旅立ちの日に」

は、希望を胸に未来に夢を託し羽ばたこうという内容のようにみえます。作詞者の恣意は分かりかねますが、時代を反映した詩のように思えてなりません。「旅立ちの日に」の詩に託された思いは、まさに現代の日本に求められる内容のように感じてしまうのは私だけでしょうか。私が授業参観をした中学3年生は、どんな思い出を胸に刻んで、どんな夢を描いて卒業式を迎えるのだろうと思ったりしました。この号が発行される頃には、新生活に夢を膨らませて、新たな出会いを迎えている頃でしょうか。そんな彼らに倣って、いつもまでも若々しく希望を持って新しいことにチャレンジしたいと想う春です。

(T・H)

RAD-AR活動をささえる会員

●企業会員 19社 (五十音順)

- ・アステラス製薬株式会社
- ・アストラゼネカ株式会社
- ・エーザイ株式会社
- ・MSD株式会社
- ・大塚製薬株式会社
- ・キッセイ薬品工業株式会社
- ・協和発酵キリン株式会社
- ・興和株式会社
- ・塩野義製薬株式会社
- ・第一三共株式会社
- ・大正製薬株式会社
- ・大日本住友製薬株式会社
- ・武田薬品工業株式会社
- ・田辺三菱製薬株式会社
- ・中外製薬株式会社
- ・日本新薬株式会社
- ・ノバルティス ファーマ株式会社
- ・ノボ ノルディスク ファーマ株式会社
- ・Meiji Seika ファルマ株式会社

●個人会員 2名 (五十音順・敬称略)

大野 善三 三輪 亮寿

RAD-AR News Vol.23 No.1 (Series No.98)

発行日：平成24年4月

発 行：くすりの適正使用協議会

〒103-0012

東京都中央区日本橋堀留町1-4-2 日本橋Nビル8階

Tel.03-3663-8891 Fax.03-3663-8895

<http://www.rad-ar.or.jp>

E-mail:info@rad-ar.or.jp

制 作：日本印刷(株)